様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００６２１

研究課題名（和文）プロレタリア文化運動研究：地方・メディア・パフォーマンス

研究課題名（英文）The studies of proletarian cultural movement: locality, media, performance

研究代表者
村田　裕和（MURATA, Hirokazu）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０４４９５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,000,000円

研究成果の概要（和文）：1920年代から30年代にかけて日本でおこなわれたプロレタリア文化運動についての総合的研究をおこなった。資料調査を重視すると共に、地方や運動の現場への着目を重視した研究方法を採用し、研究メンバーの相互協力のもとで充実した研究活動を実施することができた。当初予定していたとおり、研究論集の刊行（『革命芸術プロレタリア文化運動』2019）、企画展の開催（市立小樽文学館、2019）、学会でのシンポジウム参加やパネル発表（2019、2022）、資料調査、ガラス乾板写真のデジタル化、国際シンポジウムの開催（2022）を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦前の日本において、左翼的な労働運動や政治運動とともに、大衆文化運動もまた活発に行われていた。政治的には共産主義の影響を強く受けていたとはいえ、自由、民主主義、反戦の思想を普及する上で重要な運動であった。従来は文学運動や演劇運動など、ジャンルごとに研究されることが常であったが、本研究では多様な研究分野の研究者が協力して、プロレタリア文化運動の全体像の解明を試みた。その成果は、書籍・研究論文の発表、学会、国際シンポジウム、文学館における企画展などさまざまなかたちで発信・公開した。

研究成果の概要（英文）：We conducted a comprehensive study of the proletarian cultural movement in Japan during the 1920s and 1930s. We have adopted a research methodology that emphasizes the study of materials and a focus on local areas and movement sites, and have been able to conduct substantial research activities with the mutual cooperation of the members of the research team. As originally planned, the following activities were carried out: publication of a research collection ("Revolutionary Art Proletarian Cultural Movement," 2019), holding of a special exhibition (Otaru Municipal Museum of Literature, 2019), participation in symposiums and panel presentations at academic conferences (2019, 2022), material research, digitizing glass dry plate photographs, and holding an international symposium (2022).

研究分野：日本近代文学

キーワード：プロレタリア文化運動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題の代表（村田）および研究分担者は研究協力者の協力をえて、2015～17 年度に科研費基盤研究（C）を受け入れ、国内に存在する 4 つの資料群*の合計 4000 点以上の資料を調査した（課題番号：15K02238　研究課題名：戦前期プロレタリア文化運動資料研究）。

これらの資料には、未復刻の稀少雑誌のほか、組織内部で配布されたガリ版刷りの報告書やニュース、演劇公演のためのビラ、ポスター、プログラムなどが含まれていた。

2017 年、これらの資料について、1 点ずつ情報を採取してデータベース化し、新聞の切り抜きや写真などをのぞく 2856 点の画像を検索機能つきの DVD に収めて出版した（『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』（DVD 版）丸善雄松堂　図 1）。

これらの資料から、プロレタリア文化運動が、現場でそれを支える人々なしには成立しなかったこと、現場の人々・地方の人々こそが運動の主役であったことが明らかになってきた。

（図１）

*資料所蔵者・機関は浦西和彦氏（現在、日本近代文学館）、市立小樽文学館、大原社会問題研究所、札幌大学図書館。

２．研究の目的

本研究の目的は、プロレタリア文化運動の実態を多角的に明らかにすることである。また、運動に参加した人々の側から日本近代の文学史・芸術史・文化史・民衆史・地方史にあらたな光を当てることを目的とする。そのために、文学研究・歴史研究の出発点に立ち返り、運動の「現場」をうかがい知るための一次資料を調査･収集することを研究の最大目標とする。それらの「物証」と、理論的研究や証言・回想などを突き合わせていくことで、運動の全容を立体的に解明できると考える。

ただし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、研究目的および研究計画を部分的に修正せざるをえない状況となった。大規模な資料調査が困難となったため、規模を縮小した調査を実施し、それらの分析と報告を着実におこなうように心がけた。具体的な調査と成果については「４．研究成果」の項に記述する。

３．研究の方法

（1）『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』を含めた既存資料の分析。プロレタリア文化運動の地域的な実態や、運動の実際的な局面を解明する。

（2）追加の資料調査・収集。可能なものについては、積極的に画像公開し、プロレタリア文化運動関係についての情報拠点となるようなデータベースを完成する。コロナ禍に伴い規模を縮小した調査と個別的な成果報告を随時行った。

（3）最終的にプロレタリア文化運動にかかわるすべてのジャンル・部門について、その活動の実態を明らかにするとともに、地方支部レベルでの運動を解明する。

（4）さまざまな研究領域の研究者と連携しネットワークを構築する。

（5）シンポジウムの開催、論集の刊行による成果公開のほか、公開講座、ホームページ、文学館展示など、研究成果の公開にも積極的に取り組む。

４．研究成果

（1）2018（平成 30）年度

①『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』（DVD 版）を分析・考察し、論集『革命芸術プロレタリア文化運動』（中川成美・村田裕和編、森話社、2019 年 2 月 図 2）を刊行した。組織、運動理論、文学、演劇、美術、ジェンダーなど多様な側面から、文化運動としての相互的関係性などを明らかにした。特に、運動指導部と地方、あるいは末端の参加者との間のすれ違いなど、従来知識人中心の文芸運動として理解されていたものとはまったく異なる状況が各所に生じていたことに気付くことができた。

②その他、橋本英吉旧蔵資料調査（三島市立図書館、2018 年 11 月）、大岡欣治旧蔵資料調査（関西勤労者教育協会、2018 年 12 月）、浦西和彦旧蔵資料調査（あきた文学資料館、2019 年 2 月）を実施した。

（図 2）

（2）2019（平成 31）年度

①2019 年 7 月 6 日より 8 月 18 日まで、北海道の市立小樽文学館を会場として企画展「いま

プロレタリア芸術が面白い！ 知られざる昭和の大衆文化運動」を開催した（図 3）。この企画展は、昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会が、2017 年に刊行した『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』（（DVD 版）丸善雄松堂）および、論集『革命芸術プロレタリア文化運動』（森話社、2019 年）の研究成果を広く一般市民に公開するものとなった。

（図 3）

開催にあたっては、市立小樽文学館との共催として同館の全面的な協力を得るとともに、法政大学大原社会問題研究所の協賛を得て数多くの資料をお借りすることができた。また、札幌大学図書館にも多大な協力をいただき、同館所蔵の松本克平コレクションから多数出展いただくことができた。さらに、日本近代文学館からも貴重な資料をお借りし、計 150 点以上の資料を展示した。

また、企画展図録（日本語版・英語版）を作成し観覧者に無料配布した。展示資料の選定及び図録解説の執筆には、上記研究会メンバーのほぼ全員がかかわった。また、同期間中、3 回の講演会・イベントを開催した。

講演会：7 月 15 日「駆け抜けていった人・多喜二の後ろ姿」　講師伊藤純
上映会：7 月 20 日『山本宣治告別式』『第１２回東京メーデー』他 4 編　解説足立元
講演会：8 月 10 日「再発見、昭和の大衆文化運動」　講師村田裕和

②8 月 17 日に第 7 回研究会を北海道教育大学札幌駅前サテライトにおいて開催した。15 名が参加、5 名の研究報告がおこなわれた。

③9 月 28 日に日本比較文学会関西支部主催の関西大会において「『革命芸術 プロレタリア文化運動』を読む――文学と文化運動の交差点から」と題するシンポジウムが開催された（於立命館大学）。

④11 月 24 日、三学会合同国際研究集会においてパネル発表「プロレタリア文化運動のモダニティ」（村田裕和・木村政樹・和田崇・鴨川都美）をおこなった。徳永直『太陽のない街』（1929 年）の伝播の多様性について考察した。

（3）2020（令和 2）年度

①1921 年から 23 年にかけて刊行され、日本におけるプロレタリア文学運動の先駆的役割を果たした雑誌『種蒔く人』にかかわる演劇活動について調査・分析をおこなった。調査は秋田市の土崎図書館で 2021 年 2 月に実施した。『種蒔く人』の同人たちは、繰り返し朗読・上演活動に関心を示し、実践も行っていたものの、警察による妨害や、劇団そのものの不統一などさまざまな要因によって演劇活動を軌道に乗せることができなかったことを明らかにし、村田裕和「『種蒔く人』と表現座」（『『種蒔く人』の射程 ――100 年の時空を超えて――』秋田魁新報社、2022 年）にまとめた。

（4）2021（令和 3）年度

①雑誌『北緯五十度』と雑誌『弾道』の同人たちが 1930 年から 31 年にかけて行った論争について日本近代文学館、国立国会図書館において調査をおこない、その成果を村田裕和「アナキズム詩とネイション―猪狩満直『移住民』、更科源蔵『種薯』および『北緯五十度論争』について―」（『日本近代文学』第 105 集、2021 年 11 月）としてまとめた。従来、十分に検討されていなかった『北緯五十度』の側から論争をひもとき、『弾道』側から仕掛けられた論争が、『北緯五十度』の詩人たちを運動から遠ざけてアナキズム文芸の可能性を狭めたことを明らかにした。

②2022 年 1 月から 3 月にかけて、"Tenkō: Cultures of Political Conversion in Transwar Japan (Nissan Institute/Routledge Japanese Studies, 2021)"の読書会を開催した。全 8 回、オンラインで開催した。「転向」を国内的文脈で解釈することの弊害や、メディア・植民地・ジェンダーなどの観点から検討することの重要性を認識することができた。

（図 4）

③貴司山治撮影写真研究会を 2022 年 2 月から同年 9 月にかけて計 5 回開催し、本研究プロジェクトがデジタル化したガラス乾板の分析を行った（図 4）。

④当初 2021 年夏の実施を予定していた国際シンポジウムを、コロナ禍のために 1 年延期し

た。そのため、本年度から準備を開始した。7 月 13 日に第 1 回目の準備会をオンラインで開催し、オンラインでの準備会を翌年度にかけて計 12 回開催した。2022 年 3 月 17 日に会場となる立命館大学衣笠キャンパスで下見を行った。

（5）2022（令和 4）年度

①2021 年度から延期した国際シンポジウムを 2022 年 7 月に実施した（図 5）。ロシア文学研究者の越野剛氏（慶應義塾大学）、中国文学研究者の田村容子氏（北海道大学）、日本文学研究者の和田崇氏（三重大学）と協力して開催準備を実施し、越野氏・和田氏の科研プロジェクトと共同開催するかたちで実施した。また、内藤由直氏（立命館大学）の協力により立命館大学国際言語文化研究所の後援をえることができた。シンポジウムは 7 月 30 日、31 日に立命館大学衣笠キャンパスで実施した。

（図 5）

国際シンポジウムの名称は「吼えろアジア：東アジアのプロレタリア文学・芸術とその文化移転 1920-30」とし、1920 年代から 30 年代における日本および東アジアにおけるプロレタリア文化運動の広がりと多元的なイメージの交流について考察することを目的とした。

開催方式は対面とオンラインのハイブリッド方式として、オンラインは Zoom ウェビナーを用いた。また、オンラインでは同時通訳をおこない、日本語・英語の 2 チャンネルで発表および討議の音声を配信した。

（図 6）

シンポジウムは計 5 セッションで、各セッション 3 名、計 15 名が発表を行った。セッション 1 は「セルゲイ・トレチャコフ」、セッション 2 は「村山知義」、セッション 3 は「ジェンダー、セクシュアリティ、労働」、セッション 4 は「移民、植民地、東アジアの表象」、セッション 5 は「翻訳、プロパガンダ、アダプテーション」をテーマとした。

開会挨拶を中川成美氏（立命館大学名誉教授）、趣旨説明を村田裕和、閉会挨拶を内藤由直氏がおこなった。対面とオンラインあわせて 200 名ほどの来場者・聴講者があった（図 6）。発表者の内、1 名はアメリカから、1 名はチェコから、2 名は台湾からオンライン参加した。また海外からの対面参加はアメリカから 2 名であった。コロナ禍の続く中ではあったが、従来相互に連携する機会の少なかった研究者同士が研究分野の壁をこえて共同研究を発展させるきっかけとなった。

②2022 年 7 月 9 日の日本比較文学会関西支部のシンポジウム「転向から TENKŌ へ; 世界文学としてのプロレタリア文学」（於立命館大学）に参加し、同書執筆者で本科研メンバーの内藤由直・和田崇・村田裕和が報告を行った。

③本年度中の資料調査は、望月桂関連資料調査（2022 年 9 月）、アナキズム文芸雑誌関連資料調査（富士見市立図書館渋谷定輔文庫、2023 年 2 月）であった。これらについては継続調査が必要であり、今後の成果公開を検討している。また、同じく成果公開の一環として、日本近代文学館の 2023 年度企画展「プロレタリア文化運動の光芒」に協力するかたちで準備をおこなった。貴司山治撮影写真の公開についても継続して検討中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 村田 裕和	４．巻 61
２．論文標題 アナキズム詩の地方ネットワーク(2) ： 『弾道』『北緯五十度』論争における〈生活と詩〉	５．発行年 2022年
３．雑誌名 語学文学	６．最初と最後の頁 28～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/00010815	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村田 裕和	４．巻 105
２．論文標題 アナキズム詩とネイション ： 猪狩満直『移住民』、更科源蔵『種薯』および『北緯五十度論争』について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本近代文学	６．最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19018/nihonkindaibungaku.105.0_63	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村田 裕和	４．巻 55
２．論文標題 『太陽のない街』の脚色・翻案 ： プロレタリア文化運動におけるアダプテーションについての一考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会文学	６．最初と最後の頁 90-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 和田 崇	４．巻 55
２．論文標題 ドイツにおける『太陽のない街』の翻訳と受容：断片掲載された「日本の『ジェルミナール』」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会文学	６．最初と最後の頁 107-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村田裕和	4．巻 10
2．論文標題 空腹家の歌物語	5．発行年 2021年
3．雑誌名 浮雲	6．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内藤由直	4．巻 66
2．論文標題 広津和郎「さまよへる琉球人」と資本主義 ： "見えない糸"を想起する困難	5．発行年 2021年
3．雑誌名 國文學論叢	6．最初と最後の頁 62-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 村田裕和
2．発表標題 労農芸術家聯盟合同について――「新文戦ニュース」を中心に
3．学会等名 『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』を読む会 第19回
4．発表年 2020年

1．発表者名 村田　裕和
2．発表標題 『太陽のない街』の地方性とメディア：拡散・越境
3．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 和田　崇
２．発表標題 ドイツにおける翻訳と受容――「日本の『ジェルミナール』」及び断片掲載に関する考察
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鴨川　都美
２．発表標題 脚色『太陽のない街』の変遷――受容・パフォーマンス・ジェンダーを中心に
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鴨川都美
２．発表標題 村山知義「〈ルポルタージュ〉石炭の中の人生」の〈記録性〉
３．学会等名 昭和文学会　秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田裕和
２．発表標題 『労農文学』の成り立ちと概観
３．学会等名 『昭和前期プロレタリ文化運動資料集』を読む会
４．発表年 2018年

１．発表者名 和田崇
２．発表標題 徳永直と橋本英吉の関係～橋本英吉生誕１２０周年を期に～
３．学会等名 第42回「孟宗忌」（徳永直の会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 Edited by Irena Hayter, George T. Sipos, Mark B. Williams	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 246
３．書名 Tenko: Cultures of Political Conversion in Transwar Japan (Nissan Institute/Routledge Japanese Studies)	

１．著者名 「種蒔く人」顕彰会	４．発行年 2022年
２．出版社 秋田魁新報社	５．総ページ数 342
３．書名 『種蒔く人』の射程	

１．著者名 Edited by Irena Hayter, George T. Sipos, Mark B. Williams	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 290
３．書名 Tenko : Cultures of Political Conversion in Transwar Japan	

１．著者名 村田裕和、伊藤純、鳥木圭太、内藤由直、木村政樹、鴨川都美、正木喜勝、和田崇、武田悠希、池田啓悟、雨宮幸明、泉谷瞬、中谷いずみ、立本紘之	４．発行年 2019年
２．出版社 市立小樽文学館	５．総ページ数 48
３．書名 企画展：いま、プロレタリア芸術が面白い！ 知られざる昭和の大衆文化運動	

１．著者名 立本 紘之	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 354
３．書名 転形期芸術運動の道標	

１．著者名 足立 元	４．発行年 2019年
２．出版社 ブリュッケ	５．総ページ数 318
３．書名 裏切られた美術 ： 表現者たちの転向と挫折1910-1960	

１．著者名 中川成美・村田裕和（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 369
３．書名 革命芸術プロレタリア文化運動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	和田　崇 (WADA Takashi) (10759624)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	
研究分担者	泉谷　瞬 (IZUTANI Shun) (10802845)	近畿大学・文芸学部・講師 (34419)	
研究分担者	鴨川　都美 (KAMOGAWA Satomi) (20757546)	久留米工業高等専門学校・一般科目（文科系）・准教授 (57101)	
研究分担者	足立　元 (ADACHI Gen) (40532487)	二松學舍大學・文学部・講師 (32664)	
研究分担者	内藤　由直 (NAITOU Yoshitada) (60516813)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	鳥木　圭太 (TORIKI Keita) (30749396)	立命館大学・文学部・助教 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
吼えろアジア：東アジアのプロレタリア文学・芸術とその文化移転1920-30年代	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関